

## 平成 29 年度群馬県立自然史博物館活動の評価について

群馬県立自然史博物館専門委員 石川貴敏

評価委員会で、博物館職員の方々から平成 29 年度の事業報告と新たな評価指標に基づいた内部評価結果の報告を受けました。開館以来 2 番目に高い数値を記録した年間入館者数（実観覧者数）をはじめ、いずれの事業においても高い成果をおさめていることがわかりました。教育普及事業は、幼児、小・中学生、高校生、大人、高齢者、学校、ファミリーなど、対象を定めた活動も多彩であり、企画展や特別展事業は毎回、限られた予算の中、自然史に関心が高くない方々も楽しめるよう、企画や展示の各所に工夫が見られ、魅力的なものとなっています。評価委員会当日に拝見させていただいた特別展「ぐんまの自然の『いま』を伝える」は、長年にわたり地域に根ざした自然史調査や、保護・保全活動に携わってきた 40 以上の団体との連携・協力による展覧会でしたが、その内容は発見に満ちあふれており、多様なテーマやアプローチで群馬県の自然や博物館活動などを見つめることができ、「県民活動、連携協働拠点」としての同館の価値を明確に認識することができました。また、資料の収集保管活動や調査研究活動もコンスタントに行われており、シンクタンクの機能として取り組まれているレファレンス活動や、自治体及び各種機関における委員としての取組は、同館職員の専門性の高さを十分に証明しています。

一方、今回の報告では、前年度の評価結果をもとに取り組んだ成果とともに、幾つかの課題が挙げられていました。必要な予算の確保（平成 29 年度は前年度より削減）や施設・設備の不足や老朽化、同館の果たしている機能や活動に比して職員数が少ないことなどです。

そこで、今後に向けた提案として以下の 3 点を記します。1 点目は、県民に対する「事業活動報告会」の開催です。私は、平成 27 年度以降、同館の活動報告を受けてきましたが、その活動内容は、国内の他の自然系博物館と比べても全く遜色ないばかりか、限られた予算や人員体制を念頭に置くと、毎年、その質の高さに感心しています。海外の博物館や、国内で会員制度を設けている美術館などでは、事業活動報告会を行う事例を目にしますが、発行物で伝えるだけでなく、実際に語り合う機会を設けてはいかがでしょうか。他県に誇れる自然史博物館が群馬県にあることを、もっと多くの県民の方々に知っていただきたいのです。

2 点目は、「県立博物館・美術館のための共同収蔵センターの検討」です。内部評価結果にも「劣化や消耗が許されない標本の保存環境を維持し続けることが重要である」「当館の資料は 4 年後には 20 万点に達すると見込まれ、今後その収蔵場所の確保と、保存に適した収蔵環境の維持が大きな課題と言える」と記載されています。毎年、収蔵スペースの確保に向けて職員の方々あらゆる観点から取り組んでいる報告を聞いていますが、未だ解決の目途は立っていないようです。同館に限らず、収蔵スペースの不足は、博物館・美術館の多くが抱えている課題です。群馬県の県立博物館・美術館でも同様に課題として

あげられているのではないのでしょうか。そこで、「収蔵ゾーン」「調査研究ゾーン」「担い手活動ゾーン」「（一部）展示ゾーン」を兼ね備えた群馬県のリソースセンターを、県立博物館・美術館の方々にプロジェクトチームを組織して、検討してはいかがでしょうか。

3点目は、「博物館の持続可能な運営に向けた検討」です。文化行政の基盤や、博物館の整備・運営の在り方が急速に変化しようとしています。人口減少社会を背景に、様々な行政改革が行われるのではないかと懸念しています。既に内部評価結果に報告されているように、施設・職員・予算の不足が挙げられています。I COM京都大会（2019年9月開催）では、博物館の定義の改訂も予定されていると報じられています。今後起こりえることの想定や、日々の活動を通じて感じている課題や問題意識をもとに、これからの博物館の持続可能な運営に関する懸念事項を挙げて、今後に向けて博物館職員自らが協議した結果をもとに、対応策（ロードマップや取組、バックデータとなる資料の用意など）を事前に検討することは、現在の博物館において必要ではないかと考えます。課題に直面する前に方策を検討しておくことが肝要です。

自然と共生することが求められる私たちにとって、地域の自然史博物館が果たす役割はますます大きなものになると考えます。昆虫数の減少や、基礎科学の必要性、バイオミメティクスなど、自然史博物館のテーマになりそうな話題をよく耳にします。職員の方々の日々の尽力によって、高い実績を残している国内を代表する自然史博物館がこれからも長く充実した活動を展開できることを切に願っています。